みんな、遊びにおいでよ！

生産工程ごとに会社が分かれる分業制で成り立っている波佐見焼にあって、食器やインテリア雑貨を企画する、工場を持たない陶磁器メーカーとして知られているマルヒロ。カラフルなスタッキングマグカップをはじめとする「HASAMI」シリーズはマルヒロの代表作だ。

二〇二一年十月、マルヒロがオープンしたのが無料で開放する公園「HIROPPA（ヒロッパ）」である。

どうして陶磁器メーカーが公園を？　その素朴な疑問に代表の馬場匡平（ばばきょうへい）さんは「そうですよねぇ」と笑いながら理由を教えてくれた。「このまちにないものを作りたかったんです。僕自身も子どもが生まれ、芝生の公園が欲しかったというのもありますが、いろんな人に『遊びにおいでよ』と言える場所が欲しかった。割れ物が並ぶやきもの屋は、子どもが最も怒られる店（笑）。公園に遊びに来る子どもたちが大きくなったとき、『そういえば、あの公園にはやきものが売っていたな』『やきものと言えばHIROPPAだな』と思ってもらえるような場所を作りたかったんです。花はいつ開くか分かりませんから」。広い大地に小さな種を蒔（ま）くようなアイデアには、まちへの愛があふれていた。

マルヒロの代表・馬場匡平さん

馬場さんは上空から見て格好いい公園を造りたかったと言う。「このまちには歴史ある窯元がたくさんあります。しかし僕たちには歴史がありません。だから今の時代ならではの格好良さを追求したいと考えました。その一つがドローンの航空写真というわけです」。馬場さんは一緒にいてとても楽しい人だ。しかし飄々（ひょうひょう）としていて、どこか掴（つか）みどころがない。今後の夢についても「公園に植えた木が美しく育ってくれればそれでいい」と、会社の代表らしからぬ商売気のない言葉で応じる。しかし時折見せる、芯のようなものがたまらなく魅力的だ。

「私たちは『このデザインを作りたい』となったら、それを実現するために、工程ごとに異なる会社や職人さんにお願いします。一人じゃ何にもできないんです。分業制で、皆がプロ。このまちで良かったと心から思います」。

マルヒロには若いスタッフが多く、彼らはそれぞれ毎月、何か新しいものを生み出すことを何年も続けているという。生みの苦しみはあるはずなのに、それを感じさせないチーム・マルヒロの軽やかな笑顔が心に残った。

芝の公園は犬の散歩やお弁当の持ち込みもOK。海外アーティストの作品もあり、異文化に触れる場所にもなっている。

HIROPPAの近くにある築90年の日本家屋「OUCHI」では、マルヒロのごはん部門「えん」が週に1度、町内の企業に地元の野菜をふんだんに使ったお弁当を配達している。4月～10月は天然氷のかき氷を販売

〈マルヒロ〉

HIROPPA

HASAMIシリーズのスタッキングマグカップ